

汚名を着せられた男が半生を賭して咲かせた「たおやかな花」

——花園大学所蔵・井上紅梅訳『今古奇観』について——

勝山 稔(東北大学准教授)

(内容要旨)

花園大学に所蔵されていた『今古奇観』の翻訳は、現存する初版本が二冊という稀覯本で、中国古典小説分野の学界ではその存在さえも知られていなかった訳本である。この本が刊行された時期、『今古奇観』が用いた「白話」という文体は非常に難解で、当時の東京帝大や京都帝大の研究者でも翻訳が難しいとされ、それまで最大の訳本(『支那文学大観』)でも、四名が分担して四篇の翻訳をしたのが限界であった。

しかし訳者の井上紅梅は、独力で一〇篇もの翻訳を本書で刊行しているほか、彼の生涯を調査すると、彼は実に一八年間をかけて『今古奇観』一七篇もの翻訳を完成させていたことが判明した。その翻訳は概ね原文に忠実で、特に紅梅の場合には、過去に翻訳の経験がない篇にも果敢に挑戦している姿勢がうかがえ、近代日本に於ける中国白話小説の受容史から見れば、学術的に極めて貴重な書籍であると言える。

この輝ける業績をあげた翻訳者・井上紅梅であるが、その一生は汚名に満ちた人物であった。

彼は「支那通」として売り出した人物であった。「支那通」は中国の社会や風俗に精通した人物を指し、満州事変や上海事変など当時の社会情勢から、中国社会に精通した「支那通」が一時期もてはやされていた。しかし時代の変遷と共に「支那通」は趣味人の範疇から脱却できない単なる中国愛好者という烙印を押され、井上紅梅もその汚名を背負い続けることとなった。

しかし今回の調査で井上紅梅の生涯を考察したところ、紅梅の支那通としての活躍は彼の文筆活動の一部分に過ぎず、中国古典文学では『儒林外史』『金瓶梅』や『紅樓夢』の翻訳を手掛け、中国新文芸では、いち早く魯迅の活動に注目し、『魯迅全集』(改造社版)を独力で翻訳し、『大魯迅全集』の刊行にも参画していた。

特に最晩年の訳本である花園大学所蔵の『今古奇観』は、刊行時期が昭和一七年の年末であった。つまり(太平洋戦争の)戦時下という動乱の時代にもかかわらず、紅梅は超人的な努力を重ねて『今古奇観』の翻訳完成に情熱を傾けたのである。それはまさに「支那通」という呪縛から逃れようとする彼の執念が咲かせた「たおやかな花」であった。

はじめに

花園大学情報センターに所蔵されている書籍に、井上紅梅(本名「井上進」)の『今古奇観』というものがある。この聞き慣れない書名である『今古奇観』は、中国の明代に出版された小説集であり、井上紅梅はこの小説集を翻訳し、出版したのである。

となると、本書は数多い中国小説の訳本の一つに過ぎないと思われるがちであるが、実はそうではない。

その理由が二つある。

第一には、本書の稀少価値という点である。本書の所蔵が確認されているのは、花園大

学のほか、北海道大学附属図書館、そして日本近代文学館にある三冊だけである。ただ、日本近代文学館蔵本は再版本であり、初版本は、北海道大学と花園大学の二冊に過ぎない。文字通りの稀覯本である。

第二には、その学術的な価値という点である。『今古奇観』は白話という特殊な言語で書かれており、原文の翻訳は至難の業と言われていた。しかし本書は、当時の学界の水準から言えば未曾有の規模の翻訳で、日本における中国文学の受容史の上でも画期的な存在と言える。

このように本書は、初版本が僅か二冊という稀覯本であり、かつ刊行当時最大規模の翻訳という点から、学術的に貴重な資料であることが理解できよう。

それでは、至難の業と呼ばれた『今古奇観』の翻訳を取り組んだ井上紅梅とは、どういう人物であったのか。興味はそこに移るが、正直、井上紅梅という人物がどのような経歴を持つのかは、これまで殆ど判っていない。例えば紅梅の生涯について調査を行った三石善吉氏は「その生涯については謎ばかり」「二」と指摘する通り、彼の業績はおろか、生没年さえも不明である。

その彼について断片的に判っていることは、一つである。それが、

——井上紅梅は、「支那通」である。——
ということである。



確認できる紅梅唯一の写真
(『週刊朝日』1939年1月号)

観ているとは言えない」「二」という

そのため、斯界における「支那通」の評価は決して高くない。例えば清末小説研究者の樽本照雄氏の指摘でも、とある中国研究者に井上紅梅について質問した際に、こう言われたという。

——いわゆるシナ通だ。そんなもの引用するんじゃない「三」。

このように『今古奇観』の翻訳者・井上紅梅は、「支那通」であった人物である。それ以外のことは殆ど判っていない。これが数少ない井上紅梅に関する先行研究「四」の成果であり、本論を読まれる方々の予備知識ともなろう。

以下本論では、最初に『今古奇観』という小説の語学的性格を紹介した上で、本書の著者である井上紅梅について取り上げ、先行研究で未解明であった彼の経歴を解明する。そして斯界で「そんなもの」と呼ばれた井上紅梅が、なぜ『今古奇観』の翻訳を志したのか。彼の『今古奇観』の翻訳状況と当時の研究水準との関係をあわせて、本書刊行の由来を、できるだけ判りやすく紹介することとしたい。

一 口語で書かれた『今古奇観』

本論で紹介する『今古奇観』は明代の小説であるが、中国では、その長い歴史の中で、

表現形態の異なる三つの種類の小説が存在する。それが、

- (1) 「文言小説」(漢文体の小説)
- (2) 「白話小説」(白話文の小説)
- (3) 「現代中国語の小説」

である。中国小説で最も古い歴史を持つのは、(1)の文言小説である。文言小説は所謂「漢文体」で書かれた小説で、高校の国語の教科書にも登場するため、国語や漢文の教員の間でも名の知れた作品が多く見受けられる。また(3)の現代中国語の小説は、魯迅の『狂人日記』(一九一八)を先駆けとして作られるようになった小説であるが、本論には関係ないので、ここでは述べない。そしてここで取り上げる『今古奇観』は(2)の白話小説に該当する。

白話小説は、漢文とは異なる「白話」で書かれた小説である。この「白話」とは、口頭語——つまり当時の人々が実際に話していた言葉を漢字表記したものがベースとなっている。そのため表現形態は口語に近く、現在我々が白話小説を読解する時にも漢和辞典よりも寧ろ現代中国語辞典を用いており、白話を漢文読解の手法で全て読もうとしても相当な困難を覚える。白話小説の代表作としては、『三国志通俗演義』・『水滸伝』・『西遊記』・『金瓶梅』・『紅樓夢』などがあるが、これらの作品が中国文学の中でも著名であるにもかかわらず、漢文の教科書に殆ど登場しないのは、こういう訳があるのである。

この白話小説であるが、文言(漢文)とは異なる文体が災いして、古来訓読翻訳に精通した日本人には、非常に読解しにくい文体として知られていた。

例えば、中国文学者として著名な吉川幸次郎(一九〇四〜一九八〇)が、『今古奇観』と同類の短篇白話小説(『京本通俗小説』)の翻訳を試みた際、吉川本人も「この古い口語の中には、すでに死語となったものが多々あり、私の能力、というよりはむしろ現在の学界の能力をもってしては、手にあい兼ねると覚しい言葉が少なくない。」^{【五】}として具体的な語句を列記し、白話文の難解さを吐露している。

また戦後に『今古奇観』の翻訳を手掛けた魚返善雄^{おさなほよしお}(一九一〇〜一九六六)も、次のような翻訳の感想を残している。

じつを言うと、この種のテキストは中国文学においても相当に難解なもので、これまでも娯楽本位の趣味的紹介者は別として、語学的良心のある専門家がなかなか手をつけなかつたのもなるほどと思われる^{【六】}。

このように専門家の間でも「手にあい兼ねる」「相当に難解」な白話小説であった『今古奇観』に果敢に立ち向かったのが、本論の主人公・井上紅梅である。それでは、この井上紅梅なる「支那通」はなぜ、このような難解な『今古奇観』に取り組んだのであろうか。それを知るためには、井上紅梅なる人物の生涯を、振り返ってみる必要がある。

二 『今古奇観』の訳者・井上紅梅の生涯

(一) 幼年時代から中国出国まで

今回発見した資料によると、井上紅梅は明治一四(一八八一)年^{【七】}に(現在の)東京都新宿区新小川町にある貿易商の家に生まれた^{【八】}。本名は「進」であるが、姓は判らない。断片的に明らかになっていることは、三人兄妹の次男であったこと。大酒家の実父は

士族出身で、中国に武器を輸出して一財産を作ったが、三八歳で没したということである。紅梅一九歳の時の随筆「わか草」^{【九】}によると、冬のある日に父が倒れ数日後に急死、その後一家は離散の事態に陥っている。紅梅は一旦祖母宅に引き取られ窮乏生活を送るが、彼の行く末を案じた祖母が隣人の紹介で陸軍省の御用商家と縁組みが纏まり、明治二〇（一八八七）年四月七日、七歳で貿易商である井上商店の主人・井上由蔵（安兵衛）の養子として井上家に招かれ^{【一〇】}、以後、「井上進」となった。

その後井上家は、紅梅を商家の跡取りとして教育した。そのため明治二九（一八九六）年秋には家族の勧めで東京商業学校（高等商業学校）本科——現在の橋樑大学を受験、見事合格しているが、翌年病気のため中退のやむなきに至っている^{【一一】}。

自宅療養をする傍ら、紅梅が没頭したのは青年文学誌への投稿である。当時は文壇への登竜門として投稿雑誌が盛んに刊行され、中でも紅梅は著名誌である『文庫』（少年園・内外出版協会）や『新聲』（新聲社）に投稿し、紅梅は寄稿家の中で最年少ながら^{【一二】}、投稿開始から二年間で合計一回（『文庫』五回・『新聲』六回）もの掲載^{【一三】}を果たしている。なお掲載作品には選者の寸評が加えられ、その過半は酷評で占められるが、殊に紅梅の作品については「一篇出づるに、必ず進跡を見る、愈よたのものし」（『文庫』評）^{【一四】}、「本篇は精巧なる写真といふの外なし」（『新聲』評）^{【一五】}など、好意的な評語も見られ、当該誌の常連として知られる存在となった。

その紅梅に文学熱をかきたてる契機となったのが、後に物理学者・随筆家として著名となる寺田寅彦との親交である。

寺田寅彦（一八七八〜一九三五）は、「寺田物理学」とでもいうべき独自のスタイルを持つ物理学者で、活潑な文筆活動を展開した人物としても広く知られている。その寺田は学生時代、上京の際には井上家に下宿し、寅彦自身もここを「第二の故郷」^{【一六】}と称していた。

紅梅と寅彦の初めての出会いは明治二八（一八九五）年の夏である。寺田寅彦が単身上京した際に、井上商店の二階に一ヶ月ほど居候している。寅彦の随筆「銀座アルプス」によると、一五歳の少年・紅梅は「口ごもって、ひどくはにかんだように物を言う癖」^{【一七】}があり、紅梅の案内で京橋へ寄席の見学に行ったり、帳場で遊戯や文学の話をしたりしたという^{【一八】}。

その後も頻繁に井上家に泊まりに来ており、一九歳の青年になった紅梅と一緒に落語やレ・ミゼラブルを語り合い^{【一九】}、喫茶店に行き、紅梅からシュークリームの「シュー」は仏語のキャベツの意だと教わったという^{【二〇】}。また寅彦自身も寅彦が井上商店を訪れ紅梅らに俳句の手ほどきをすることもあった^{【二一】}。このように紅梅は多感な青年期に、寅彦を介して漱石や子規という文学思潮を吸収し、その後も文学誌への投稿に没頭している^{【二二】}。

（2）新聞記者時代と支那風俗研究会の創設

その紅梅が中国出国の意志を固めた直接的な原因は、養父の死去であった。

今回発見された紅梅の「支那随筆」^{【二三】}によると、「廃嫡」の六年後、養父が死去し、自分の身辺に「お家騒動」が持ち上がったという。その結果、紅梅は井上商店の商権を無条件で譲渡することとなり、窮地に陥った紅梅は、やむにやまれず上海渡航を決意したという。

紅梅は養父が懇意にしていた親友の息子が上海の某商社の主任を勤めていたことを思い出し、自ら上海に赴き就職斡旋を依頼したという。その際は先方の説得もあり一旦帰国したが、その後台湾や香港などを転々としたのちに、再び上海に戻ってきている。そして紅

梅は上海淡水路に生活の拠点を構えると^{二四}、上海の邦字新聞社・上海日日新聞に入社し、二年間ほど勤務している^{二五}。

ところが紅梅の回想によると、新聞社は「新聞記事も政治経済方面は殆ど支那紙、外字紙の翻訳で、ルーターも外字の夕刊から翻訳して無料で使っていた」という有様で、購読収入が少なく経営は広告料に大きく依存するため、スポンサー企業に関係する事件記事は禁忌となるなど彼の不満は根強く、とある商社の取引事件をきっかけに退社する。そして紅梅が設立したのが支那風俗研究会である。

そもそも紅梅はなぜ風俗研究を志したのか。従来は確たる根拠もなく「酒にあけ女遊びに暮れ、食道楽と芝居に暮れた。彼は知らず知らずのうちに、深く支那の五大道楽の世界に入り込んだ」^{二六}と指摘されていたが、今回発見された紅梅の記録^{二七}によると、中国風俗研究の発端は紅梅の友人・歐陽予倩から紹介された余毅民に依る所が大きい。

余毅民は、早稲田大学出身で後に有力紙晶報の社長や中華連合通信社の創設者を歴任した中華民国維新政府の要人である。彼は紅梅と面識を得た当時は、新聞報の記者や神州日報の編集長であったため、その後懇意となった。

そして紅梅と余毅民は、毎晩神州日報館で落ち合い、新聞記者や小説家達と三馬路の青楼を巡り、「支那の遊芸や風俗についていろいろ貴重な教えを受けた」という。またこのようにして余毅民が語った婚礼を子細に書き取り、後日「支那風俗」に掲載したと紅梅自身が明記しているところから、紅梅一個人による遊興の見聞ではなく、余毅民を中心とした新聞関係者や小説家とも交友が、風俗研究を志す発端となったのであろう。

そして大正七年（一九一八）年四月、井上紅梅は「支那の人情風俗、趣味嗜好に関する諸般の事項を調査研究するを以て目的」^{二八}とする支那風俗研究会を発足させる。研究会は上海武昌路に支那風俗発行所を構え、日本語雑誌『支那風俗』^{二九}を上海で創刊。不定となる場合もあるがほぼ隔月で刊行が行われている。

紅梅のコメント^{三〇}によると、『支那風俗』における編集方針は「現代の支那生活をありのままに描写」することを目的としている。それが他の支那通にはない彼の特徴となったのが、現場で実見しなければ決して書くことのできない詳細な描写である。一部であるが紅梅による詳細な筆致を阿片吸引に関する記述から紹介しよう。

座薬のような細い棒状のカタマリを一塊取つて、五分ほどに折り、熟した針の尖にそれをつけて豆洋灯に翳した。カタマリは溶けかかっていると指の腹でくるくると丸めつけ又焙つた。

……程好く焙ぶられた阿片は針の上に珠をなしつつ、その独楽の孔の上に載せられたかと思ふと左手の親指と人さし指が下から面白く活動して阿片を抑へ、グサリとさして針を引くと、丁度乳房のような恰好になつて真中に小気孔が出来る……陳さんは管の末端を啣へてシュウシュウと吸つた。彼の頬はゴムスポイトのように動いたかと思ふと煙は二つの鼻孔から濛々と噴出して忽ち部屋一面にひろがった^{三一}。

このようにまるで現場をそのまま写真にうつし取るような精密な記述は「紅梅の文章は分析的、求心的で説得力がある」^{三二}とあるように評価は高い。そのため紅梅の筆による中国風俗の著作は、当時の日本の知識人に中国社会を知りうる有効なルポルタージュとして歓迎され、またこの時期に「支那通」としての紅梅の認識が定着したものとと思われる。

例えば大正一〇（一九二一）年に芥川龍之介が上海を周遊した際、現地の最適な情報源として紅梅の『支那風俗』^{三三}を掲げており、当時から中国の風物や風俗を詳述する情報源として日本の知識人に重用されていたのである。

(3) 南京転居と畢碧梅との結婚

このように内外で評価を受けた支那風俗研究会の活動であるが、大正十一年一月に刊行された『支那風俗』四巻一号を最後に停刊となり^{〔三四〕}、同年発行の『支那在留邦人名録（二三版）』を最後に上海企業索引欄から「支那風俗発行所」が姿を消している。その原因については明確な資料が見出せないが、一つの原因として、紅梅の結婚がある。

紅梅は大正一〇（一九二一）年六月二十七日に南京へ転居している。南京転居の原因は詳らかでない。紅梅は転居後も仕事の関係で上海を往来し、また雑誌『支那風俗』も予定通り刊行されている。ただ彼はこの南京で、とある女性と出会うことになる。それが蘇州出身の中国人・畢碧梅である。紅梅によると「当時わたしの希望は支那家庭内に入って支那人同様に暮らしてみたかった」^{〔三五〕}とあり、馴染みの理髪店主人の周銓で一四歳の子供を連れた畢碧梅を紹介される。

かくして大正一一（一九二二）年四月に碧梅と結婚し、その後南京城内五福街で生活を始めるが、結婚とほぼ同時に『支那風俗』は四巻一号（一九二二年一月）を最後に停刊している。この号も最終号を感じさせるものではなく、その後も継続して刊行の意志があったのかも知れないが、事実としてこの時期に『支那風俗』は終焉を迎えている。

南京時代の紅梅は著述に専念している。著作としては、中国における各種悪徒土匪の内幕を研究した『匪徒（土匪研究）』^{〔三六〕}、各地の歳時記を中心に農村の冠婚葬祭や風俗を地方別に説明した『支那各地風俗叢談』^{〔三七〕}、を刊行するが、この頃の代表作は古典的淫書を翻訳した『金瓶梅と支那の社会状態』^{〔三八〕}であろう。本書は紅梅の業績中でも有数の大作で三分冊合計一〇〇〇頁を優に超える。またこの時期に小説家・田中貢太郎が紅梅を訪ねた記録が残っている。

五月の十二日になって、私は画家の谷君を伴って南京へと往った。静かな廃残の陰の深い金陵の城市。その定相王廟対面蔡家花園には、栗林医院という日本人のやっている病院があつて、その二階の病室に井上紅梅氏がいた。井上氏はシナ文学の研究者で『支那風俗』という三巻になった大部の著書をはじめ他にも二三の著書がある。日本人で真箇にシナ文学に精通している者では氏を措いて、他にはないと言つていい。私はその未見の知己に栗林病院の二階で逢った。病院にいるほどであるからよほど悪い所があるのだらうと思つて往つてみると、起きていて迎えてくれた。すこし健康はすぐれないが、菓も飲んだこともなければ、一回も診察してもらつたことはないと言つて笑つた。壁に倚つた卓の上には、その一卷を出して後を書いている「金瓶梅」の原本と原稿紙とが置いてあつた^{〔三九〕}。

また詳細は後述するが、『今古奇観』の翻訳も、既にこの時期から着手していたことが判明している。花園大学所蔵の『今古奇観』が刊行される実に二〇年近く前であるが、これについては、一括して後述したい。

かかる経緯で始まつた南京での生活であるが、紅梅が常に悩みの種としていたのが経済的な困窮と妻の阿片中毒であつた。『支那風俗』刊行当初から資金面で苦労していたが、南京に移つた後には更に経済状態が悪化し、また家庭生活も三石氏の指摘によると「妻は日本人を主人とした肩身の狭さから、彼を人前に出したがらず、人が訪ねてくると別室に彼を隠してしまうほど」^{〔四〇〕}という。更には結婚して間もなく、妻は阿片中国に罹つている。そして妻は「阿片を吸つて一時の苦を凌ぎ、麻雀をやつて一時の憂さを晴らす」^{〔四一〕}という生活に陥り、山積みとなつた借金のため屢々家計は逼迫し、「星が見え雨の降り注ぐアバラヤ」でひたすら書き続けなければならない生活に陥ることとなる^{〔四二〕}。

また家庭内では妻の阿片中毒が深刻化する。後年紅梅が増田渉に話した所によると「妻が遊ぶ小遣いをくれるような亭主でなければ、亭主の資格はない……自分にはそんな稼ぎがないから結局別れた」という^{【四三】}。離婚後、碧梅との生活時期を「本統に大切な時期」と回想した紅梅だが、「詰まらぬ感情」が災いして「遂に書く気になれなかった」という。そして紅梅は南京を去り、大正一三（一九二四）年一〇月には蘇州へ単身転居^{【四四】}している。

（4）新聞記者より再び上海へ

蘇州での一年余りの沈黙の後、紅梅は再び上海に戻っている^{【四五】}。その直接的な理由は、中国情報新聞『日刊支那事情』^{【四六】}の文芸欄を担当することとなったからである。

『日刊支那事情』はその名の通り、中国の最新情報を邦字で報道紹介する日刊紙であったが、その発行元・日刊支那事情社の所在地は東京市麹町区にある。東京の新聞社がなぜ紅梅に白羽の矢を立てたかという点、日刊支那事情社は上海日日新聞社東京支社と同一で、紅梅は過去に上海日日新聞の記者を勤めていた過去がある。そのため紅梅に『日刊支那事情』の文芸欄を担当する依頼がもたらされたのであろう。

一見古巣である上海の新聞社に戻り、元の鞘に収まった印象があるが、上海で雑誌『支那風俗』を刊行していた時期と、（南京時代を含めた）『日刊支那事情』を担当する期間とでは、紅梅の扱う題材も大きな変化を見せている。それが中国古典文学への憧憬と、当時進行していた中国の新文芸への関心である。

紅梅自身によると南京時代から当時までは「純粹の支那風俗」に関心を抱き、「唐宋元明清」の文芸に「没頭」していたという^{【四七】}。そのため紅梅はほぼ連日——時には同一紙面に二〜三本の記事を執筆し、中国の弾詞や『龍女伝』等の文言小説・唐詩・『儒林外史』、そして『今古奇觀』の白話小説の紹介に尽力していた。

また、それまで「過渡期の中途半端なハイカラがった作品」と批判し「新文芸に対しては甚だ冷淡であった」という紅梅であったが、新聞で紹介されていた小説家・張資平の紹介記事を目にして、「いかにも面白そうなので、私は早速四馬路に飛んで行って創造月刊を買い求め、郭沫若の詩、郁達夫の小説を見た」^{【四八】}とあるように、張資平の小説『寒流』の翻訳を連載したのを機に中国の新文芸にも関心を広げ、胡適や譚正璧による現代文学の論評など中国新文芸に関する情報を日本に発信している^{【四九】}。

そして同年には「阿Q正伝」を手始めに一連の魯迅作品の翻訳を開始し、昭和三（一九二八）年には『上海日日新聞』や『上海時論』に「社戯」「葉」「風波」「在酒楼上」の翻訳を発表。日本に於ける中国新文学運動の紹介にも多大な貢献をしていることも明らかになってきた。

また紅梅はこれと同時期に『紅い土と緑い雀』を刊行している。本書は「阿片と麻雀の弊害を指摘し、その点に於いて我々の欠乏せる智識を補ふつもり」^{【五〇】}として企画されたが、中国人の生活に焦点を絞って詳述したもので、南京周遊を回顧した佐藤春夫の随筆には「この時遂に見なかつた雨花台の眺望は後年井上紅梅の著『紅い土と緑い雀』によつて知つた。……現代支那の庶民の生活を窺ふにはこの上なしの一篇である。」^{【五一】}と、紅梅の活躍は国内でも目にも止まる存在となつていたのであろう。それを裏付けるように、大正一五（一九二六）年六月、当時屈指の総合雑誌『改造』に紅梅の随筆が初めて掲載されると、『中央公論』^{【五二】}や東洋協会の『東洋』^{【五三】}、そして中国研究団体である東亜研究会など在京の中国研究機関に度々寄稿している。そして昭和四年には寄稿先の殆どが国内紙への投稿で占められるようになり、その翌年には活躍の舞台を上海から東京に移している^{【五四】}。

(5) 日本への帰国

紅梅の帰国時期については、従来不明確で定説が無かったが、筆者による調査の結果、昭和五（一九三〇）年と明記される史料を確認できた^{〔五五〕}。なぜこの年であったのかその明確な理由は定かではない。ただ昭和五年は紅梅が五〇歳を迎えた年であり、一つの区切りと考えたのかも知れない。帰国当初の所在地は未詳であるが、昭和七（一九三二）年の年始芳名録に「東京牛込通寺町一〇番地（現在の新宿区神楽坂六丁目八番地）」^{〔五六〕}とある。

これまで述べてきたとおり、当時の紅梅の著作は「支那風俗研究」と「中国古典小説」、そして魯迅を中心とする「中国新文芸」がメインであり、当時の紅梅は特に後者に力点を置いていた。

しかし当時の日本では、中国新文芸について殆ど関心がなく、そもそも魯迅という存在も殆ど知られていなかった。そのため昭和二（一九二七）年に魯迅の作品「蕪」「風波」「在酒楼上」を翻訳し、在京の雑誌社に持ち込んだが「認むる者無し」^{〔五七〕}であったと不満を漏らしている。

そのため帰国前後の紅梅による著述は、専ら典型的な「支那通」としての題材である支那風俗に傾斜している。その筆頭に当たるのが東亜研究会の『東亜研究講座』である。東亜研究会は、政治家の西原亀三が中心となり、貴族院の院内会派公正会、有力実業家や有識者が加わり大正一四（一九二五）年に設立した研究団体で、彼は中国社会の理解を促進するため東亜研究講座に度々寄稿^{〔五八〕}している。

またその一方で紅梅はこの時期に日中友好医療団体である同仁会（東亜同文医学会）刊行の『同仁』、東亜経済調査局の『東亜』に中国事情通として参加する傍ら、特に梅原北明主宰の『グロテスク』^{〔五九〕}をはじめとする当時流行のエログロ雑誌にも寄稿している。

(6) 報道記者として再び上海へ

その彼に再び上海へ赴かせる契機を作ったのが、満州事変（昭和六く七年）と上海事変（昭和七年）である。周知のことではあるが、満州事変は奉天郊外における柳条湖事件を契機に、関東軍が中国東北部へ侵略、昭和七（一九三二）年には満州国独立を宣言する、また満州事変直後の昭和七（一九三二）年には抗日運動の抑圧のため日本軍が上海へ派兵。上海周辺で激戦を繰り返す事態となり、日本のメディアの関心は一気に中国に向けられるようになった。そのため上海の事情に深く精通する紅梅に白羽の矢が立ったのである。

昭和七（一九三二）年五月の『犯罪公論』第二巻第五号には「悪辣極る排日の真相から日支両怨破裂に至るまで」という上海事変に関する紅梅の記事が掲載されているが、その際にも特派員として上海に派遣されている^{〔六〇〕}。かくして上海の有力出版社である金風社に拠点を移し^{〔六一〕}、風雲急を告げる上海情勢や、当時の上海文壇の情報を日本に向けて発信することとなった。

紅梅によるルポルタージュ記事は、今回が初めてではない。例えば昭和二（一九二七）年の上海クーデター（四・一二事件）^{〔六二〕}でも活躍したほか、上海事変に於いても、藍衣社によるテロ活動の報道^{〔六三〕}は、「大局がよく押さえられ、かつ詳細にわたり、出色のレポート」と高い評価^{〔六四〕}を受けている。

また、紅梅はこの時期、当時屈指の総合誌の出版元・改造社と密接な関係を持ち、改造社の雑誌『改造』への寄稿や『文芸』の編輯にも携わり、周作人との対談^{〔六五〕}や劇作家バーナード・ショーの上海訪問では、魯迅が舌を卷くほどの迅速ぶり^{〔六六〕}を見せるなど、言

わばジャーナリストとして脚光を浴びている。

その紅梅は、昭和七（一九三二）年に改造社から魯迅の小説集「呐喊」「彷徨」のほぼ全てを翻訳した『魯迅全集』^{〔六七〕}を発表する。翻訳に際しては中国小説研究者・大高巖^{〔六八〕}

の助力を得て、当時有数の言論雑誌であった

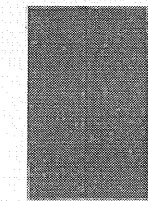
『改造』にも全頁広告を打ち、五〇〇頁を越える大作が刊行された。その後も品切れのため増刷という記録

^{〔六九〕}が見える所から、上々の売れ行きを示したに違いない。

前章で紹介したとおり、日本に於いて魯迅の重要性に気付いていなかった現状のもと、いち早く魯迅作品の翻

魯迅全集

魯迅作改



社 造 改

井上紅梅譯 版



訳に取り組んだ紅梅の先見性と着眼点は非常に高かった。これにより紅梅の試みはこれ成功したかに見えた。

しかし、原作者であった魯迅の評価は極めて厳しかった。例えば改造社版『魯迅全集』の刊行直後にあたる昭和七（一九三二）年一月十九日付増田涉宛の魯迅書簡には、こう書かれている。

井上氏訳の『魯迅全集』が出版して上海に到着しました、訳者からも僕に一冊くれました、ちよつと開けて見ると其訳の多に驚きました。あなたと佐藤先生の訳したものを参照しなかつたらしい、実にひどいやりかただと思います。

ここでの魯迅は、誤訳が多く、増田涉と佐藤春夫の訳と対照していないことを根拠にあげ「実にひどいやりかた」^{〔七〇〕}と紅梅を非難していることが看取できる。そのため紅梅は、「魯迅に酷評されたディレッタント」^{〔七一〕}或いは「魯迅の作品を翻訳し、魯迅にののしられ」^{〔七二〕}た人物と論評され、この魯迅の下した改造社版『魯迅全集』に対する評価が、その後、斯界に於ける井上紅梅に対する評価を形成する原因となり、学界では紅梅の著作を学問的な組上に載せること自体半ば禁忌となるに至ったのである^{〔七三〕}。

（フ）戦時下の壮絶な訳業

その後の紅梅の貧窮は眼を被うばかりである。『大魯迅全集』^{〔七四〕}の翻訳陣に加わった一九三七年頃は、「本郷菊坂のあまり立派とはいえぬ長屋に一人住み……三、四冊の本と一升ビンのころがつっている荒寥たる部屋で、酒と執筆に明け暮れていた。」^{〔七五〕}といい、関連するか否かは判然としないが、この時期には「朝川澄之介」の偽名での寄稿も見られた^{〔七六〕}。

その後の紅梅であるが、中国文学者・武田泰淳との共訳で『支那辺疆視察記』（一九三七）^{〔七七〕}を発表、その後改造社から彼の支那風俗研究の集大成として『中華万華鏡』（一九三八）^{〔七八〕}を出版、その後更に改訳を行った魯迅の小説『阿Q正伝』（一九三八）を新潮文庫で刊行している。また当時の雑誌の寄稿先には『文芸春秋』^{〔七九〕}や『週刊朝日』^{〔八〇〕}などがあげられるが、徐々に掲載誌は漸減し、昭和一四（一九三九）年以後は、紅梅の文

名は一般誌から全く姿を消している。

その頃紅梅は、創元社の『アジア問題講座』（一九三九）の制作^{〔八二〕}に参加している。本講座の執筆担当者は、白鳥庫吉・和田清・加藤繁・那波利貞・江上波夫・石田幹之助・鳥山喜一・青木正児・長沢規矩也など名だたる研究者が名を連ね、紅梅は勇躍したと思われるが、執筆担当は魯迅の紹介でも中国時事情報でもなく、支那風俗としての「阿片と煙草」であった。

紅梅の晩年について、筆者の調査によって現時点までに判明している概略を紹介したい。三石論文では創元社の『アジア問題講座』（一九三九）を最後に「彼の消息は完全に断ちきられてしまった」^{〔八三〕}とし、一部の人名事典には「一九四四年前後に上海で没したらしい」^{〔八三〕}と指摘するが、これは何れも正しくない。

紅梅は、昭和一五（一九四〇）年まで東大赤門向かい附近にあたる本郷区菊坂四人（文京区本郷四丁目三三番）の長屋に居住していたことが確認され、この時期に『金瓶梅』を題材とした『小説西門慶』（一九四二）^{〔八四〕}を発表している。またその前後の時期に、東洋協会（現・拓殖大学）の月刊誌『東洋（The Orient）』へ断続的に寄稿を続ける一方、遅くとも昭和一七（一九四二）年には大森区（大田区）野倉町三二〇番地（大田区中央四丁目一五番二及び三）に転居、同年一二月には台湾の清水書店から明代短編白話小説の翻訳集『今古奇観』^{〔八五〕}を出版する。

戦時色強まるこの時期に三四〇頁を越える大冊の刊行はそれ自体奇跡に近いが、何とその『今古奇観』の巻末には、井上紅梅による翻訳『紅樓夢』の近刊案内が掲載されている。筆者の手元には京都で調査した際のメモしか残されていないが、花園大学の学生であれば、直接閲覧も可能であろう。

その案内によれば「B 6 版四〇〇頁」と定価まで記載があるので、具体的な出版の目処も立っていたと思われる。『紅樓夢』は全訳ならば「B 6 版四〇〇頁」に収まる分量ではないので抄訳に相違ない。なお、この紅梅訳『紅樓夢』は管見の限りに於いては現存が確認できず、刊行されたのか否かも判然としない。しかし、当時既に還暦を過ぎた紅梅が戦時下の非常時に二冊合計して七〇〇頁を越える翻訳の刊行を企画すること自体、執念にも似た彼の超人的な努力を痛感せざるを得ない^{〔八六〕}。

その後の動向は資料が少なく推測によるが、大森区市野倉町一帯は昭和二〇（一九四五）年四月一五日の空襲で被災しており、恐らくは紅梅の居住地も焼失した可能性が高い^{〔八七〕}。それから終戦までの間、紅梅の消息は途絶えている。

終戦直後も彼の足どりは不明であるが、戦後初めて編纂された文芸家協会の『文芸年鑑（昭和二三年版）』（桃蹊書房）にある「文化人名簿」には、井上紅梅が記載されている。

また、終戦直後の日本占領下で収集された雑誌等の資料を収集したプランゲ文庫（The Gordon W. Prange Collection）によると、再春荘新生会文芸部編『高原地帯』（第二輯、一九四九）に再春荘の入院患者であった「井上紅梅」が発表した俳句が確認できた。

再春荘とは、熊本県西合志村にある国立の結核等療養所であり、昭和二四（一九四九）年当時紅梅は結核を患っていたのであろう。『高原地帯』に掲載された俳句にも、彼の病状をうかがえるものが残されている。

新らしき 浴衣に細りし 手をとほす

なお日本文芸家協会の『文芸年鑑』「文化人名簿」によると、一九四九年版まで井上紅梅の氏名が見えるが、五〇年版では削除されている^{〔八八〕}。そのため『文芸年鑑』の判断を根拠とすれば、紅梅は昭和二四（一九四九）年から昭和二五（一九五〇）年の間に死去し

たのではないかと推測される「八九」。

三 「支那通」と呼ばれた井上紅梅の業績

以上が井上紅梅の略歴である。このように紅梅は青年時代の文学雑誌投稿に始まり、上海・南京・東京を中心に五〇年以上にわたって活発な執筆活動を行っている。この彼の業績を回顧すると、その内容は大きく五種類に類別することが出来よう。それが、

- (1) 創作関係……………『文庫』『新聲』投稿作品他
- (2) 中国風俗関係……………『支那風俗』『支那ニ浸ル人』『中華万華鏡』他
- (3) 中国古典文学関係…『今古奇観』『儒林外史』『金瓶梅』『紅樓夢』の翻訳
- (4) 中国近代文学関係…『魯迅全集』『大魯迅全集』『新潮文庫 阿〇正伝』^{一九〇}
- (5) 報道関係……………『上海騒擾記』^{一九一}、『上海藍衣社のテロ事件』^{一九二}
「ショウと孫文未亡人」^{一九三}、「蒋介石氏の新生活運動に就て」^{一九四} 他

である。(2)の中国風俗関係の著作は非常に多いが、その内容も多種多様である。例えば①「上海風俗史」^{一九五}、「青海土人風俗」^{一九六}、「廣東生活の種々相」^{一九七}などの各地の風俗を紹介したものや、②「支那劇の過去及現在」^{一九八}、「支那芝居の稽古」^{一九九}、「現在の支那芝居」^{二〇〇}、「支那劇を如何に観る」^{二〇一}などの中国の演芸を論じたもの。③「支那料理物語」^{二〇二}、「支那料理の見方」^{二〇三}、「支那正月の食べ物」^{二〇四}などの中国料理を紹介したもの。④そして「グロ漫談・寒ねつ玉の問題」^{二〇五}、「上海売笑史畧」^{二〇六}、「開房・其他(支那結婚異情風俗)」^{二〇七}などの荒唐無稽で興味本位なものまでかなり差がある。

ただ、これらの記事に共通して言えるのが、紅梅の著述の中に、現地でしか知ることの出来ない中国人の風俗や生活の実態を紹介しているという点であり、日本の文壇で受け入れられたのも、ひとえにこの一点にあった。

例えば、現在の日本でも井上紅梅と言えば、日本に麻雀を普及させた男として知られている。紅梅は中国風俗紹介の一環として「賭博の研究」^{二〇八}と、『家庭遊戯 麻雀の取方』^{二〇九}を刊行している。前者は雑誌『支那風俗』の一環として骨牌や天九牌など中国賭博の一環として扱ったと思われるが、結果的に現存する日本語で書かれた麻雀解説書の中で最も古い^{二一〇}。その後大正二二(一九三三)年(一九三三)年から日本で麻雀の関心が高まると、紅梅はそれに呼応して『家庭遊戯 麻雀の取方』^{二一一}を出版、国内最初の解説本『麻雀 支那遊戯』^{二一二}とほぼ同時期に刊行を果たした。現在では井上紅梅の名前は寧ろ「麻雀普及の祖」として紹介されるのはこの経緯からである。

恐らくは紅梅が「支那通」として認識される所以となったのは、彼の執筆活動の中にこの種の傾向が見えたからであろうし、その点は否定できない事実である。ただ、この種の中国風俗の話題なら何でも記事にするという紅梅の姿勢は、恐らくは自らの生計維持のため、好むと好まざるとにかかわらず寄稿をせざるを得なかったに違いない。

事実、紅梅は、執筆活動による原稿料でのみ生計を立てており、彼に関する史料を調べると、随所に彼が経済的に逼迫していた記録が見える。また、紅梅と同時期に同じ境遇にあった中国文学者・大高巖の日記にも「せつせと原稿を書いて、稿料を得るよりほかに手はなかった。そのために中国文学とかぎらず、流行のエログロ物でもやむを得ない」^{二二三}とある所からも理解できるのではなからうか。

以上、紅梅が「支那通」と呼ばれる所以について論じたが、前述の通り、「支那通」と

呼ばれる所以を生み出した著述は、紅梅の執筆活動の一部に過ぎないことが理解できる。それでは「支那通」以外の著述については如何なるものであったのか。本論のメインテーマである『今古奇観』の翻訳を中心に述べることにしたい。

四 井上紅梅による『今古奇観』の翻訳状況

(一) 花園大学所蔵『今古奇観』(一九四二)の概況

これまで述べてきたとおり、紅梅が生涯にわたって関心を寄せた分野の一つとして、中国古典小説の翻訳であった。今まで『金瓶梅と支那の社会状態』(一九二三)の刊行は知られていたが、今回『今古奇観』の翻訳を、六一歳の時に刊行していることが判明した。刊記によると出版日は昭和一七年二月二〇日、配給元も日本出版配給株式会社台湾支店とある通り、出版統制下の戦時出版であったことがうかがえる。

また本書の序に見える紅梅の住所は「大森(区)市野倉」と記され現在の大田区大森中央に位置するが、発行所である清水書店は台北市宮前町、印刷所に至っては台中市明治町である。この複雑さの背景には戦時下という制約が影響したのかも知れない。紅梅による翻訳篇は左記の通りで、篇数は一九二六年の『支那文学大観』(四篇)を遙かに凌ぐ一〇篇にも及び、「三言」所収篇の翻訳としては当時最多を誇った。

- ① 「金の番人」(『今古奇観』卷一〇)
- ② 「開運の蜜柑」(『今古奇観』卷九)
- ③ 「唐伯虎の美人画」(『今古奇観』卷三三)
- ④ 「水上の一家」(『今古奇観』卷一四・『警世通言』卷二二)
- ⑤ 「支那の蒲島李清」(『醒世恒言』卷三八)
- ⑥ 「鯉と役人」(『醒世恒言』卷二六)
- ⑦ 「許家の兄弟」(『今古奇観』卷二)
- ⑧ 「嘯圃の酒友」(『今古奇観』卷一五)
- ⑨ 「酒仙李太白」(『今古奇観』卷六)
- ⑩ 「王安石の涙」(『警世通言』卷四)

未曾有の大量な翻訳を、しかも戦時下に出版までこぎ着けたのには、訳者である紅梅の並々ならぬ努力がうかがえるが、紅梅の『今古奇観』に対する認識や見解については殆ど史料がない。ただ、序文を見る限りでは『大唐三藏取经詩話』や「話本」などの術語が登場するほか、その巻頭に東京外国語学校蔵『今古奇観』の序文である姑蘇咲花主人漫題を掲載、その出典を「塩谷温博士の『三言を中心とした小説書目』より」と明記している。『三言を中心とした小説書目』は中国短篇白話小説の『三言』が一九二六年に発見された際に、当時の東京帝国大学の塩谷温が学会発表の際に配布した冊子で、どこから入手したのかは不明である。本冊子に言及した『支那文学大観』第一巻からの転載したものと考える方が妥当と思われるが、少なくとも当時の学界における研究状況にはある程度精通していたことが理解できる。

また斯界で有名となった一九二六年における『今古奇観』の「三言」(『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』)発見の情報^{二四}も把握済みで、翻訳篇目には早速『今古奇観』に収録されていない『警世通言』(巻四)や『醒世恒言』(巻二六・巻三八)が加えられている。蓋し『京本通俗小説』を除き、「三言」発見以降初めての「三言」所収篇の邦訳ではなからうか。

ちなみに第四章「水上の一家」は、『今古奇観』巻一四の翻訳とあるが、紅梅が掲げた原題名は『今古奇観』の表題「宋金郎・団円破甃笠」ではなく『警世通言』巻二二の表題「宋小官・団円破甃笠」を記載している。そのため『今古奇観』翻訳時に、紅梅は『警世通言』及び『醒世恒言』を入手し、直接参照していたものと思われる。

(二) 幻に終わった日本堂書店版『新訳今古奇観』(一九二四)

このように一九四二年に発表した翻訳であるが、調査の結果、紅梅自身は『今古奇観』の翻訳をかなり早い時期から企画していた記録が確認できる。

例えば清水書店版『今古奇観』刊行の一八年前にあたる一九二四年一〇月、上海の日本堂書店の広告に「近刊予告」として「井上紅梅著『新訳今古奇観』」の書名が登場している。仮に右記翻訳が予告通り出版されていれば、鈴木真海の『鴛鴦譜 外三種』(一九二五年五月)の刊行よりも更に七ヶ月早く、仮に刊行されていれば日本初の口語訳として受容史の歴史を大きく塗り替える存在になっただけに違いない。

しかし現時点において『新訳今古奇観』の現物、若しくは『新訳今古奇観』刊行を証明す

近刊豫告

井上紅梅著 家庭 遊戯 麻雀の取り方

井上紅梅著 新 今古奇観

出版目録御申越次第送呈

1924年10月当時の出版広告
この広告が、紅梅が『今古奇観』翻訳出版を準備していた証拠となった

る記録は全く残されておらず、恐らくは出版直前となつて刊行が中止となつた公算が強い。

本広告が掲載された書籍は『支那二浸ル人』(一九二四)で、紅

梅の中国に於ける日常生活を中心に中国風俗を記述した随筆集で、まさに「支那通」としての紅梅の代表作である。その筆者が一転してなぜ古典小説の翻訳をこの時期に試みたのか。また、かかる企画が出版直前になつてなぜ頓挫したのか。疑問は大きく二つに分かれる。

第一の疑問である「なぜこの時期に『今古奇観』の翻訳を手掛けたのか」という問題であるが、紅梅自身もこの変化について、『支那風俗』の刊行終了後は「唐宋元明清に没頭」していたと回顧^{二二五}する通り、その根本には「中国風俗研究から古典小説へ」という紅梅自身の関心の変化が看取されるが、それを目に見える形で可能ならしめたのは、妻の畢碧梅の存在も大きかったのではなからうか。

これは当時の翻訳作業の特徴とも言えるが、所謂漢文訓読法による訓読翻訳から脱却し、(日本語の)口語訳による翻訳を試みる場合、翻訳作業現場に於ける中国人の存在が往々にして見られる。例えば同時期に上海で活躍した日中親善団体「桃義会」による『今古奇観』巻二八「喬太守乱点鴛鴦譜」の翻訳(一九二四)^{二二六}についても、その序文で「今回宋代奇譚鴛鴦譜を試訳するに当たりては、華人許問蓉氏の助力を得」とある通りであるが、殊に畢碧梅は蘇州人であり、吳方言を含む「三言」「二拍」若しくは『今古奇観』の理解には大きな助力をもたらしたに違いないし、実際畢碧梅との結婚後に紅梅は『金瓶梅』(一九二三)、『今古奇観』(一九二四)、『儒林外史』(一九二六)と集中して翻訳を手掛けていた。

また、第二の疑問「出版直前になってなぜ頓挫したのか」であるが、出版中止に関する直接的な記録が皆無である。そのため確証には至らないものの、中止に至るまでには幾つかの経緯が見受けられるため、ある程度の推測が可能である。

出版を中止した日本堂書店は、紅梅の書籍を幾つか出版している。その一つに本書刊行の直前に出版した『金瓶梅と支那の社会状態』（一九二三）がある。本書は全三冊の合計一〇〇〇頁を優に超える大作で、紅梅も「訳者は今更本作者の偉大なるに驚く。彼は支那に蟠る社会の真の病原を発見してゐたのである。」^{〔二七〕}と本書の価値を力説するが、日本国内では、検閲の結果販売禁止の処分が下された^{〔二八〕}。

日本堂書店は上海文路にある日本語出版社の老舗で、専ら南京・上海等の地域情報の出版に従事していた。しかし一九二二年からは「支那香艶叢書」^{〔二九〕}をはじめとした扇情的な刊行物が急増している。紅梅の『金瓶梅と支那の社会状態』の出版方針も、その一環と思われる。

古典的淫書として知られる『金瓶梅』の出版は大きな売り上げが予想されたのか、日本堂は本書の版權を紅梅から購入、初版発行から一ヶ月後に増刷されるなど増産体制を図った。しかし、肝心の日本国内では販売禁止となり、版元の日本堂は相当の打撃を受けたに違いない。

それゆえ一般の知名度の低い『今古奇観』は出版が見送られ、同じ近刊予告に掲示された『家庭遊戯 麻雀の取り方』のみ、当時の日本に於ける麻雀ブームを背景に予定通り刊行^{〔三〇〕}したのであろう。

ならば『今古奇観』の翻訳は、その後どうなったのか。

（三）『日刊支那事情』における翻訳の連載（一九二六）

『新訳今古奇観』の出版中止の後、しばらく紅梅は唐代伝奇等の翻訳を発表^{〔三一〕}していたが、出版中止の一年半後に新聞紙上で『今古奇観』の翻訳を連載している。表題は「支那小説逐字訳『今古奇観』」、篇名と掲載日の詳細は左記の通りである。なお『日刊支那事情』は保存状態が劣悪であり、国立国会図書館や東洋文庫、そして東京大学文学部図書室などで現在確認できる範囲であることを附言しておく。

- ① 「薄情郎」（『今古奇観』卷三二）一九二六年四月一日〜十七日
- ② 「蝴蝶夢」（『今古奇観』卷二〇）一九二六年四月一日〜二十五日
- ③ 「移花接木」（『今古奇観』卷三四）一九二六年五月二十七日〜七月二日
- ④ 「鴛鴦譜」（『今古奇観』卷二八）一九二六年七月一日〜八月一日
- ⑤ 「義還原配」（『今古奇観』卷四）一九二六年八月一日〜八月二十八日
- ⑥ 「孝女藏児」（『今古奇観』卷三〇）一九二六年八月二十九日〜九月二十四日

先行訳との関係は④「鴛鴦譜」一篇が鈴木真海訳と重複^{〔三二〕}するのみで、それ以外はすべて未訳篇である。翻訳連載に先駆けて紅梅は長文の前書きを記しているが、それには、従来の日本は秦漢や唐代の研究者が多く明清の文芸については等閑に付されていたものの、近年注目を浴びてきていると指摘した上で、『今古奇観』をこのように紹介する。

今此に訳載せんとする『金玉奴』は明末の代表的小説集とも云うべき今古奇観四十篇中の一だ。この書出でてより約三百年間現今に至るまで苟も文学を識る支那人で之を繙読せぬものはあるまいと断言し得る程、広く長く行はれたもので、殊に篇中の「杜十娘」「売油郎」等は演劇の脚本としてもお馴染の梅蘭芳や賈璧雲の得意物とし

て歓迎されて居る。尚ほ翻訳は……思素修飾の余暇もあるまいから老実に原文の逐字訓訳を試みることにした。

と、京劇（梅蘭芳・賈璧雲）の演目から『今古奇観』の翻訳を想起したと言及している。京劇に造詣の深い紅梅の『今古奇観』翻訳を手掛けた動機が垣間見えて興味深い。

紅梅の翻訳状況について、大正一五年七月二十七日付「鴛鴦譜（八）」の一節を紹介している。宋代景祐年間の杭州のこと、劉家で開催された婚礼の場面であるが、『今古奇観』巻二八の原文に、

……①双双却是两个女人同拜、随従人没一个不掩口而笑。

都相見過了、然后姑嫂对拜。劉媽媽道、『如今到房中去與孩兒④冲喜。』樂人吹打、引新人進房、来至臥床边、劉媽媽揭起帳子、叫道、『我的兒、今日娶你瀝婦来家冲喜、你須才扎精神則个。』

とあるところを、紅梅は次の通り翻訳している。

都相見過了。すつかり礼拝が了ると然後姑嫂②对拜（新人と慧娘が対ひ合つて礼拝をする）③少々滑稽ではあつたが之れで婚礼の儀式は無事に済んだ、劉夫人は

『如今房中へ到つて、我兒を④冲喜やりませう』

と云ひながら先きに立つと、樂人は笛を吹き羅を打して新人を引、して房に進む、劉夫人は先づ臥床の前に至り帳子を掲げて我兒を呼んだ。『今日は汝の瀝婦が来て呉れた目出度日です、汝も精神を才扎しなくてははいけませんよ。』

老実に原文の逐語訳を試みた紅梅の意図通り、可能な限り原文・原語を残しながらルビで語釈を加えている。翻訳は概ね忠実でその水準も低くはない。また読者への配慮も窺え、傍線②「对拜」の解説は無論のこと、傍線③「少々滑稽ではあつたが之れで婚礼の儀式は無事に済んだ」は原文にない一節であるが、これは、原文の傍線①「双双却是两个女人同拜、随従人没一个不掩口而笑（礼拝が双々女同士だから、随従人一同は一人として口を掩ふて笑はぬものは無いといふ滑稽な場面が演出された）」の一文が前回の連載で言及されたことに呼応する。これは新聞紙上で毎日細分されて連載される事情から、前後の脈絡を把握しやすいように紅梅が補正したものであろう。ただ傍線④にある「冲喜」は、重病人に結婚式を挙げさせたりして厄払いをし、病気を回復させることで日本語では「厄払い」や「縁起直し」に近いが、そこまでの語釈を求めるのは酷だったかも知れない。その他の箇所を概観すると、一般読者の便宜のため原文に見えない加筆が目立つが、概ね翻訳水準としても相応のレベルにあることや、大半が未訳篇であつた所からも、その受容史的な価値は無視できない。

ただ、『日刊支那事情』で翻訳された六篇は、その後刊行された清水書店版『今古奇観』で訳出された一〇篇は全く重複しない。推測の域を出ないが、以前にも紅梅は経済的事情から著書の版權を出版社に直接販売^{二三}することが多く、『新訳今古奇観』刊行契約時に、紅梅は『今古奇観』の訳文と出版権を、そのまま日本堂書店に購入させた可能性が考えられるからである。

(四) 學術雜誌『東洋』における翻訳(一九三九～四一)

それでは紅梅による『今古奇観』翻訳の試みは、以後どうなつたのであろうか。それを

知る手掛かりとなるのが、学術雑誌『東洋』である。

掲載誌『東洋 (The Orient)』は一九二二年に創刊された月刊誌で、発行元は東洋協会(現拓殖大学)。紅梅は、本誌上で一六年間に延べ三一回もの寄稿が確認できる。『今古奇観』の訳篇は次の通り七回(六篇)にのぼり、一九四一年四月号の「白蛇伝」を除く全ての篇が、殆ど文字の異同なく清水書店版『今古奇観』に継承されているので、間違いなく清水書店版『今古奇観』の前身と考えてよい。

- ① 「支那浦島・李清の話」(『醒世恒言』卷三八) 一九三九年三月号
- ② 「知事殿が鯉になった話」(『醒世恒言』卷二六) 一九三九年九月号
- ③ 「王安石の涙」(『警世通言』卷四) 一九四〇年六月号
- ④ 「白蛇伝」(『警世通言』卷二七) 一九四一年四月号
- ⑤ 「唐伯虎の美人画」(『今古奇観』卷三三) 一九四一年七月号
- ⑥ 「酒仙李太白」(『今古奇観』卷六) 一九四一年一〇月号
- ⑦ 「続・酒仙李太白」(『今古奇観』卷六) 一九四一年一二月号

訳篇で新たに『醒世恒言』と『警世通言』が見えるが、これは『今古奇観』の母体である「三言」の発見(一九二六)による。しかし「三言」発見以後、肝心の「三言」訳篇が取り組まれた記録は残されておらず、恐らくは紅梅による『東洋』掲載の訳篇が嚆矢となる。

(五) 花園大学所蔵『今古奇観』における紅梅の訳篇(一九四二)

さて、清水書店版『今古奇観』における訳篇の水準は如何なものだったのか、ここで少しく分析を試みたいと思う。

その分析の方法であるが、紅梅の訳篇と現在の訳篇を比較することは容易だが、紅梅の訳篇した時期と、訳篇するための専門書や工具書が充実した現在とでは訳篇環境も大きく異なる。そのため紅梅の訳篇と、当時の別の訳篇とを比較することで、彼が当時の訳篇水準の中でどのような位置にあったのかを探る必要がある。そこで同じく『今古奇観』の訳篇を手がけ、高い評価を得た増田渉^{増田渉}の訳^{二二四}と重複篇が存在するので、ここで訳篇の一篇「開運の蜜柑」(『今古奇観』卷九)を用いて訳篇状況を比較することとしたい。

増田渉(一九〇三〜一九七七)は、東京帝大出身の中国小説研究の専門家で、島根大学、大阪市立大学、関西大学教授を歴任した。その増田は、一九二六年に東京帝国大学文学部支那文学科に入学すると佐藤春夫に師事、『平妖伝』等の訳篇に従事^{二二五}し、紅梅も健筆を振るった『日刊支那事情』にも『今古奇観』に近い『警世通言』卷七「陳可常端陽仙化」の訳篇を連載^{二二六}している。

その彼が昭和八(一九三三)年に『世界ユーモア全集(支那篇)』^{二二七}の中で『今古奇観』卷九を訳しており、『世界ユーモア全集』の月報では「完璧に近い名訳」^{二二八}と称している。これは編集子の意見であり、無批判的には受け入れられないが、当時の訳篇水準から検討すると、訳篇水準が高く、強ち誇張とも言えない。

舞台は明代成化年間、蘇州府長州県で「倒運漢」というあだ名を付けられた文若虚が富商となる物語の冒頭部分を検証する。原文では、

- 話説國朝成化年間、蘇州府長州縣闔門外有一人、姓文名實、字若虚。①生來心思慧巧、做著便能、學著便會。②琴棋書畫、吹彈歌舞、件件粗通。幼年間、曾有人相他有巨萬之富。③他亦自恃才能、不十分去營求生産、坐吃山空、將祖上遺下千金家事、看看消下來。以後

曉得家業有限、看見別人經商圖利的、時常獲利幾倍、便也思量做些生意、卻又百做百不著。一日、見人說北京扇子好賣、他便合了一個伙計、置辦扇子起來。上等金面精巧的、先將禮物求了名人詩畫、免不得是沈石出、文衡山、祝枝山拓了幾筆、便值上兩數銀子。中等的、自有一樣番人、一隻手學寫了這幾家字畫、也就哄得人過、將假當真的買了、他自己也兀自做得來的。④下等的無金無字畫、將就賣幾十錢、也有對合利錢、是看得見的。揀個日子裝了箱兒、到了北京。豈知北京那年、自夏來、日日淋雨不晴、並無一毫暑氣、⑤發市甚遲。交秋早涼、雖不見及時、幸喜天色卻晴、有妝兒子弟要買把蘇做的扇子、袖中籠著搖擺。來買時、開箱一看、只叫得苦。

という箇所を、増田は、

明の成化年間(日本では応仁の乱の頃)蘇州の閭門外に、姓を文、名を実、字を若虚といふ者があつた。①生れついて賢く、何でもよくでき、よく会ひ、②琴棋書画から吹弾歌舞にわたり、何でも一とほりは通じてゐた。幼年の頃、曾つて或人が彼の面相をみて巨万の富を得るだらうと云つた、③彼も亦自ら才能を待み、あまり精を出して働かなかつた。座して食へば山も空しだ、祖先の遺産千金の身代は看る看る減つて行つた。やがて身代にも限りがあることを悟つた。他の者が商売をして、常に幾倍もの利益を儲けるのを見て、自分も何か商売をやらうと考へて、いろいろやつてみた。だがすることゝみな失敗に終つた。

ある日、北京で扇子を売るともうかるといふ話をきいた、そこで一人の仲間と共同して、扇子を買入れた。上等のものは金面の精巧なもので、先づ、礼物を持つて行つて名人に詩画を書いてもらつた。沈石田、文衡山、祝枝山などに幾筆か書いてもらふとどうしても数兩の銀を要した。中等のものは、やはりさういふ二書きをする連中がゐて、立所にそれら名家の書画を模写して、それでも人の目を欺くことが出来、贗物を真物として売るのである。彼自身も元々それをやつて来たのである。④下等のものは金箔もなく書画もないもので、それでも幾十錢かに売つても、元値と同じくらゐの利益を見ることが出来るのである。

扇子の売れさうな時期を見はからつて、箱に装つて、北京に持ちこんだ。ところがその年北京は夏に入ると共に、毎日毎日の淋雨で、少しも暑気がない、⑤扇子の売れるのが甚だ遅れた。立秋にまだならない時、幸にも天氣が晴れあがつた。氣取つた青年たちが蘇州の扇子を買つて、袖の中へ入れてブラブラと振つて歩かうといふ時になつたので、箱を開けて見たら

「しまつた！」

と叫ばざるを得なかつた。

と訳しているが、紅梅は、

明の成化年間、蘇州閭門外に姓は文、名は実、字は若虚といふ者があつた。①生れつき器用な質で、すること、なすことそつがなく、学ぶことは良く判り、②風雅な道も芸事も何でもござれ、という風だつたが、幼年の頃、或る人相見から、お前は百萬長者になれると言はれて、③すつかり己惚れて了舞ひ、ろくろく仕事もせず遊んでゐるが、坐して食らへば山も空し。祖先の遺した大事の財産もみるみるうちに使ひ減らし、儲て財産には限りがあるものだ、と氣の付いたのは、ずつと後のことで人が商売していつも何倍といふ利益のあるのを見て、矢つ張り商売人に限ると考へ、いろいろ手出しをしてみたが、自分でやつてみると何をしても旨くゆかなかつた。

或日北京で扇子が売れるといふ話を聞いて、さつそく一人の手代を相手に扇子製造に取掛かった。上等品は金地念入りの細工物で、先づいくつかのお札を出して、名のある先生の揮毫を需めた。それは少とも沈石田、文衡山、祝枝山の筆に成つたものでなければならぬが、その代り売価は一本何両といふしろものだ。中等品はそれ相当のイカ物師があつて、一つの手で諸大家の書画を書き別け、人を偏して偽物を本物と言つて売るのであるが、さういうことは本来彼自身がお手のものだ。④下等品は金もなく、書画もなく幾十銭といふ下手ものだが、それでも本手に対しては何割かの利益がある。儲て良き日を択んで箱を納め、北京に行つたが、生憎くその年は夏のかかりからずつと降り出し、少しも暑さを感じないので、⑤一本の買手もなく、秋のかりにはモウだいぶ涼しくなつて季節は通り越したけれど天気は持ちなほし、見威坊の若者達は蘇州扇子を求めて袖の中をつかひ草とするのでポツポツ買ひに来た時、箱をあけてみるとコリヤ情けない。

と翻訳している。基本的に両者とも原文に即した翻訳を心掛けていたため、大きな内容の齟齬は見られない。ただ幾つかの各論を取り上げると、紅梅訳は一見して逐語訳を旨としているものの、原文の忠実さを基準に言えば増田訳よりも意識の程度がやや大きいかと思われる。

例えば傍線部①「生來心思慧巧」の「心思」は「頭の働き」「知力」、「慧巧」は文章語で「賢く器用であること」であり、頭脳が明晰で且つ手先が器用であると「頭脳」と「手先」という異なるレベルのものに優れているとしている。また、「心思慧巧」は類例に「心思靈巧」というものがあり、「氣が利いていて巧み」「賢く器用」「頭がよく働く」のニュアンスがある。そのため増田は「生まれついて賢く」と頭脳を重視し、紅梅は「生れつき器用な質」と「手先」を重視している。なお、斯界に於ける翻訳のスタンダードと思しき平凡社中国古典文学大系の千田九一訳「二九」は「生まれつき氣のきく男」と「氣がきく」という性格面を取っており、三者三様の訳となつている。そのためこの箇所は、双方で訳が異なるが増田訳も紅梅訳も語釈の上では間違いないとまでは言えない。

また、傍線部②「琴棋書畫、吹彈歌舞、件件粗通」であるが、ここに増田訳と紅梅訳の特徴の一端が見える。この箇所を逐語訳すると「件件」は「すべてのこと」「何れのこと」で、『清平山堂話本』「快嘴李翠蓮記」にも「件件俱全(全て揃っている)」という表現がある。「粗通」は「ほぼ通じている」と言う意味である。そのため「琴や将棋や書画、笛や太鼓や歌舞まで、あらゆる事に一通り精通している」となる。ここで増田は「琴棋書画から吹彈歌舞にわたり、何でも一とほりは通じてゐた」と、やや表現は直訳でかたいものの原文に忠実に翻訳している。その一方、紅梅は「風雅な道も芸事も何でもござれ」という風だつたと「琴棋書畫、吹彈歌舞」の一々を訳さず「風雅な道も芸事も」とし、「件件粗通」を「何でもござれ」と、日本語として自然である分、やや意識を試みている。この箇所の「粗通」はあくまで「粗」なのであり、厳密には「何でもござれ」ではなく、「ある程度通じている」が妥当であろう。

増田訳は出来るだけ原文を残しながら忠実に解釈を試みており、その結果日本語としては硬い表現も少なくない。一方の紅梅は一字一句を厳格に翻訳するというよりも、前後のコンテキストも含めて、意味を自然な日本語に置き換えようとしているのが理解できよう。

また、傍線部③も傍線部②と同じ傾向が見えよう。傍線部③「他亦自恃才能」を増田は「彼も亦自ら才能を恃み」と訓読翻訳を彷彿とさせるが、紅梅は「③すっかりうぬぼれてしまひ」と自然な表現である。

傍線部④「下等の無金無字畫、將就賣幾十錢、也有對合利錢、是看得見的。」は、文若

虚が北京で売りさばこうとした扇子の中でも、下等品をどのようにするかが書かれている。この一文は「(名人の揮毫がある上等品や中等品とは異なり) 下等品は(上等品や中等品のような) 金面(金の細工)も揮毫も画もないが、何とか数十銭で売れば、元値と同じ利益がある」という意味となる。この文章のポイントは「將就」と「對合利錢」が的確に翻訳できているかである。

原文の「將就」は白話語彙で「どうにかこうにか」「なんとか」。「對合利錢」は「元値と同じ利益」や「倍の利益」を指すが、増田は「下等のものは金箔もなく書画もないもので、それでも幾十銭かに売つても、元値と同じくらゐの利益を見ることが出来るのである」と、「對合利錢」はほぼ正確に翻訳しているものの、「將就」は「それでも」とやや曖昧だが、それでも概ね原文に忠実と言えよう。

一方の紅梅は「下等品は金もなく、書画もなく幾十銭といふ下手ものだが、それでも本手に対しては何割かの利益がある」とある。ここでは、該当箇所の前文にある「下等的」を「下等な……という下手もの」と、重複して訳しているが、「將就」を増田訳と同じく「それでも」と訳している。ただ「對合利錢」の箇所を紅梅は「本手に対しては何割かの利益がある」と訳しており、「元値と同じ利益」や「倍の利益」という意味ではなく「何割かの利益」と増田訳に比べて曖昧な表現となっている。

このように紅梅訳は増田訳に比べて若干意訳が多い。それは原文の理解が覚束なかった結果なのかと言え、必ずしもそうとは限らない。例えば傍線部⑤「發市甚遲」は「初めての商いがとても遅れた」という内容で、理解に苦しむ文ではない。増田訳は「扇子の売れるのが甚だ遅れた」とほぼ忠実に訳すが、紅梅訳は「一本の買手もなく」と表現している。つまり紅梅の場合には原義を知りながらも読者に理解しやすいように内容を意図的に意識している可能性が考えられる。

紙幅の都合もあり、若干の考察にとどめたが、紅梅訳は、概ね原文に忠実な逐語訳を旨とし、当時の状況の中では高い水準で翻訳が行われていることが理解できよう。また増田訳を比較したところ、紅梅訳は細部で若干の意訳の傾向が見られるが、紅梅の読者も一般人が多い。そのため厳密な精読よりも物語としての内容理解を優先したのであろう。その意味からは、翻訳の技術的水準としてはやや増田訳には劣るが、その水準は決して低いとは言えず、増田訳と並んで良質な翻訳と言える。

しかも、『日刊支那事情』掲載分を含む合計一七篇という大規模な翻訳篇数であった点、そして所収一七篇中の七割が明治以降翻訳の経験がない未訳篇で占められているという点も注目に値する。筆者は明治時代以降に於ける『今古奇観』の受容史について検討を試み、服部誠一、幸田露伴、宇佐美延枝、東吐山、金國璞、佐藤春夫、鈴木真海、今東光、伊藤貴麿、柳田泉、増田渉、井上紅梅、神谷衡平、そして魚返善雄について翻訳状況を調べたが、これほどの未訳篇を手掛けた人物は存在せず、「抄訳や翻案はあるが、忠実な全訳はまだなかった」^{二三〇}というふれこみだった魚返善雄でさえ、一八篇中未訳篇は三割に過ぎない。高い水準の翻訳、そして未訳篇への果敢な挑戦。この二点から考慮すれば、パイオニアとしての紅梅の姿勢は十分に評価される必要があるだろう。

おわりに —— 紅梅の『今古奇観』とは何だったのか

以上、井上紅梅と、彼が翻訳した『今古奇観』について検討してきた。また従来知ることの出来なかった紅梅の生涯について、新出史料を駆使してその概要を明らかにした。

彼の生涯を通じて理解できたことは、従来、一介の支那通に過ぎないと考えられていた紅梅は、それ以外の分野にも旺盛な執筆活動を行っていた事実が明らかになった。特に中

国古典文学や中国新文芸には造詣が深く、数多くの翻訳を手掛けた一面も確認でき、また報道記者としても優れた現地ルポルタージュを残していたことも判明した。無論従来の「支那通」と呼ばれた彼の側面は否定できるものではなく、今回の調査では従来発見されていなかった荒唐無稽な寄稿も数多く行われていたことも否定できない事実である。しかし、紅梅は決して単なる支那通の範疇で語ることの出来ない人物であることは今回の『今古奇観』の発見で明らかになったに違いない。

不幸にも刊行時期が戦時中という厳しい出版統制のため、刊行部数も限られていたためでもあろう。紅梅の『今古奇観』は現存する部数は極めて少なく、紅梅が『今古奇観』を発刊から僅か五年後に『今古奇観』の翻訳を試み始めた魚返善雄^{二三〇}も、翻訳の「あとがき」に先行する翻訳について紹介しているが、魚返もこの紅梅の翻訳には全く触れておらず、その後の村松瑛^{二三二}、吉川幸次郎^{二三三}の翻訳でも一切言及されていない。

その後の『今古奇観』の翻訳事業は、一九六〇年前後から始まった平凡社（東洋文庫・中国古典文学全集・中国古典文学大系）や東洋文化協会（全訳中国文学大系）という一連の訳文が翻訳文献の（一つの）スタンダードとして定着したためか、それ以前の翻訳の取り組みについては、その存在さえも殆ど取り上げられることはなくなってしまう。

しかし、今一度、花園大学所蔵の『今古奇観』を繙くと、最初の翻訳の企画から実に一八年をかけた訳業は見る者を圧倒させる。最初の出版企画は刊行直前で幻に終わり、『日刊支那事情』掲載の翻訳も版權の問題なのか、後の訳本には活かされなかった。この二度の不幸を乗り越え、学術雑誌での連載を経て実に四度目でようやく出版に至ったが、それはまさに本書は紅梅が半生に渡り丹精込めて育て続けた「たおやかな花」であったのである。その執念はどこから来たのか。

上海渡航を経て中国風俗の雑誌を刊行し「支那通」として脚光を浴びた井上紅梅、彼はその後、南京や上海に舞台を移し、中国古典文学や魯迅を中心とした中国新文芸に活路を見出だそうとしたが、帰国した紅梅の扱われ方はやはり「支那通」であった。つまり、一度付けられた烙印を消すことを、紅梅は終生出来なかつたのである。その意味において紅梅の半生にわたる『今古奇観』の翻訳は、この「支那通」という呪縛から逃れようとする紅梅の執念から来るものに違いないのではなからうか。

本稿は平成二一年度文部科学省科学研究費補助金（特定領域研究）の交付を受けた研究成果の一部である。

【一】三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」三五～三六頁参照。

【二】尾崎秀実『現代支那論』（岩波書店、一九三九）参照。

【三】樽本照雄『清末小説探索』（法律文化社、一九九八）一四三頁参照。

【四】井上紅梅については、大正・昭和戦前期に於ける「支那通」を考察した三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」（橋川文三他編『近代日本と中国（下）』朝日新聞社、一九七四）や、符麗紅・三宝政美「井上紅梅和中国」（『国際経営・文化研究』五巻一号、二〇〇一）による紅梅の著作に関する考察が見られるが、三石論文は井上紅梅とともに後藤朝太郎等の支那通紹介の性格が強く、符・三宝論文は、井上紅梅による随筆に関する考察に限定されているに過ぎない。

【五】吉川幸次郎「あとがき」『西山一窟鬼』（筑摩書房、一九五六）二四七頁参照。

【六】魚返善雄「あとがき」『中国千一夜（香艷の巻）』（日本出版協同、一九五三）二

二九頁参照。

【七】『東亜関係人士要覧(第一輯)―専門家・事情通集録―』(東亜研究所 一九四二) 八六頁にある井上紅梅の記述は左記の通り。

井上紅梅(明治十四年東京出身) 著述業

独学、大正二年渡支上海日日新聞記者を経て雑誌「支那風俗」を経営、同十年に南京に移り著述に専念、昭和五年帰朝後支那風俗習慣に関する著述多し、支那慣行通。

著書「支那風俗」(上中下三卷) 「金瓶梅と支那社会状態」(上中下三卷) 「支那各地風俗叢談」 「阿片と煙草」 其他 東京市大森区野倉町三二〇

【八】新小川町での生活については、紅梅「過去の銀座と現在の上海」(東洋協会編『東洋』(昭和九年九月号、一九三四) 参照。

【九】「わか草」『文庫』一二卷一号(一九九九年四月) 参照。

【一〇】これにより紅梅は井上姓となるが、旧姓は未詳である。また紅梅自身も「母も亦何故か己を捨てぬ」(「愛宕山」『新聲』一編四号、一九九九年)とあるとおり、実母に対する怨みにも似た感情を抱いていたことがうかがえる。

【一一】「されど云ひ甲斐なき多病の吾、十四歳の春、父母は商業見習ひにとある家につかはし給ひしが、熱病の爲め半年ならずしてかへりきぬ。十六歳の秋、又もや学問を修めしめむと商業学校に入れ給ひしが、未だ三年生にも至らざるにふと脳病に罹きて、一日勉むれば一日休み、筆記さへできざるに至りて、遂に校を退きつ」紅梅「愛宕山」『新聲』一編四号(一九九九年四月)

【一二】「作者は、本誌の寄稿家中にて、最も年の少なき御方と推しまつる」(「緑陰小話」『文庫』一〇卷三号(一九九八年八月)の選評。

【一三】掲載作品は以下の通り。

○「遊獵」『新聲』四卷六号(一九九八年六月)

○「鵠が沼の一夕」『文庫』一〇卷一号(一九九八年六月)

○「鷺が島の嵐」『新聲』五卷一号(一九九八年七月)

○「緑陰小話」『文庫』一〇卷三号(一九九八年八月)

○「不在の聲」『新聲』五卷四号(一九九八年一〇月)

○「鮎鮎売」『文庫』一一卷一号(一九九八年一月)

○「姿見の浜」『文庫』一一卷五号(一九九九年二月)

○「忍ぶ艸」『新聲』一編二号(一九九九年二月)

○「わか草」『文庫』一二卷一号(一九九九年四月)

○「愛宕山」『新聲』一編四号(一九九九年四月)

○「あやめ草」『新聲』二編一号(一九九九年七月)

【一四】「わか草」『文庫』一二卷一号の寸評参照。

【一五】「ひとり旅」『新聲』三編二号(一九〇〇年二月) 寸評参照。

【一六】「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(三)』(岩波書店 一九九七) 二七八頁参照。

【一七】「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(三)』二七五頁参照。

【一八】「明治十九年にはもう東京を去って遠い南海の田舎に移った。そうして十年たった明治二十八年の夏に再び単身で上京して銀座尾張町の竹葉の隣のI家の二階に一月ばかりやつかいになっていた。……帳場で番頭や手代や、それからむすこのSちゃんといっしよに寄り集まっているいろいろの遊戯や話をした。年の若い店員の間には文学熱が盛んで当時ほとんど唯一であったかと思われる青年文学雑誌「文庫」の作品の批評をしたりしたことであった。……むすこのSちゃんに連れられては京橋近い東裏通りの寄席へ行った。」(「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(三)』岩波書店、一九九七) 二七二〜二七四頁参照。

- 【一九】寺田寅彦『寺田寅彦全集（一八）』一三七頁参照。
- 【二〇】「銀座アルプス」『寺田寅彦全集（三）』二七三〜五頁参照。
- 【二一】寺田寅彦日記明治三十六年一月二四日、同年六月二五日条参照。『寺田寅彦全集（一八）』二五〇・二七二頁参照。
- 【二二】掲載作品は以下の通り。
- 「根生院」『文庫』一四卷二号（一九〇〇年二月）
- 「ひとり旅」『新聲』三編二号（一九〇〇年二月）
- 「肩摩轂撃」『文庫』二〇卷四号（一九〇二年六月）
- 「汐馴衣」『新聲』八編二号（一九〇二年八月）
- 「卵の花くだし」『文庫』二二卷二号（一九〇二年九月）
- 「金竜山」（筆名：すすむ）『新聲』八編三号（一九〇二年九月）
- 「柵無小舟」『新聲』九編二号（一九〇三年六月）
- 「落葉」『文庫』三〇卷四号（一九〇五年一月）
- 【二三】紅梅「支那隨筆 暗殺の都・上海」（『週刊朝日』三五卷二号、一九三九）参照。
- 【二四】紅梅「四象橋日記」（『支那に浸る人』日本堂書店、一九二四）参照。
- 【二五】「支那在留邦人名録（八版）」（金風社、一九一七）上海在留邦人名簿索引欄参照。上海の邦字日刊新聞には朝刊紙で『上海日日新聞』と『上海日報』が、また夕刊では六頁構成の『上海経済日報』と三紙が存在していた。和田博文「上海在留日本人の出版活動」（『アジア遊学』六二号、二〇〇四）参照。
- 【二六】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」三六〜三七頁参照。
- 【二七】紅梅「暗殺の都・上海」『週刊朝日』一八八〜一九一頁参照。
- 【二八】「支那風俗研究会則」（『支那風俗』一卷一号、一九一八）一一八頁参照。
- 【二九】支那風俗研究会『支那風俗』（一卷一号〜四卷二号、一九一八年四月〜二二年一月）参照。
- 【三〇】本段落の括弧内の記事は全て紅梅「序」『支那風俗（上篇）』（日本堂書店、一九二〇）一〜二頁による。
- 【三一】紅梅「阿芙蓉奇談」『紅い土と緑い雀』（支那風俗研究会、一九二六）八〜九頁参照。
- 【三二】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」三七頁参照。
- 【三三】芥川龍之介「上海游記」（大阪毎日新聞、一九二二年八月〜九月）参照。
- 【三四】その後の支那風俗研究会の出版物としては、四年後の紅梅『紅い土と緑い雀』（支那風俗研究会、一九二六）があるが、会員寄稿による雑誌刊行の形式ではない。
- 【三五】紅梅「支那に浸る人」（一九二四）自序二頁参照。
- 【三六】紅梅『匪徒（土匪研究）』（日本堂書店、一九二三）参照。
- 【三七】紅梅『支那各地風俗叢談』（日本堂書店、一九二四）参照。
- 【三八】紅梅『金瓶梅と支那の社会状態（上）』（日本堂書店、一九二三年三月）、『同（中）』（一九二三年一〇月）、『同（下）』（一九二三年七月）参照。
- 【三九】田中貢太郎『貢太郎見聞録』（中央公論社、一九八二年）二九二〜九三三頁参照。
- 【四〇】三石氏前掲書「井上紅梅——上海の変化とともに」三八頁参照。
- 【四一】紅梅『酒、阿片、麻雀』（一九三〇）一〇二頁参照。
- 【四二】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」三八頁参照。
- 【四三】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」三八頁参照。
- 【四四】紅梅「自序」『支那に浸る人』（一九二四）一〜二参照。
- 【四五】『紅い土と緑い雀』（支那風俗研究会、一九二六年）の刊記によると、一九二六

年一月時点で紅梅の住所は上海市閘北大陸里六五号とある。

【四六】『日刊支那事情』（発行人・山政政敏 編輯兼印刷人・中山栄造 東京市麹町区元園町一丁目二七番地）

【四七】紅梅「支那の新文芸——張資平『寒流』」『日刊支那事情』大正一五年五月八日条参照。

【四八】紅梅「支那の新文芸——張資平『寒流』」『日刊支那事情』大正一五年五月八日条参照。

【四九】なお『日刊支那事情』は現在、国立国会図書館・東京大学文学部図書室・愛知大学豊橋図書館・東洋文庫で所蔵が確認できるが、合計しても一九二六年四月一日（創刊号）から一九二七年三月三十一日までしか存在しない。三月三十一日の文芸欄は紅梅の翻訳『儒林外史』（第九七回）を継続中で、その後『日刊支那事情』紙上で紅梅がいかなる文筆活動を行ったのか、現時点で把握できない。

【五〇】紅梅「紅い土と緑い雀」（一九二六）四頁参照。

【五一】佐藤春夫「曾遊南京」（『改造』一九卷一三三号、一九三七）参照。

【五二】「支那の家庭を説く」『中央公論』昭和二年六月号、「支那の大衆文学」『中央公論』昭和三年三月特別号参照。

【五三】紅梅「支那劇の過去及現在」『東洋』（昭和三年七月号、東洋協会）の他、以後も三一点もの翻訳や論考、随筆が確認されている。

【五四】従来は帰国の時期が不明であったが、『東亜関係人士要覧（第一輯）』（一九四二）より「昭和五年帰朝」と確認できる。

【五五】『東亜関係人士要覧（第一輯）——専門家・事情通集録——』（東亜研究所 一九四二）八六頁参照。

【五六】『同仁』六卷一月号（昭和七年一月）「年始芳名録」参照。

【五七】紅梅「魯迅年譜」『魯迅全集』（改造社、一九三二）五二一頁参照。

【五八】「支那料理の見方（東亜研究講座一四輯）」（東亜研究会、一九二七）、「支那人の金銭慾（東亜研究講座一五輯）」（同右、一九二七）、「支那人の迷信」（同右、一九二九）参照。

【五九】「支那符咒考（一）」（三）『グロテスク』二卷七〜九号、一九二九年七〜九月、「支那靈藥發達史（不老長生秘伝）」（同誌二卷九号、一九二九年九月）、「支那革命畸人伝」（同誌二卷一〇号、一九二九年十一月）、「グロ漫談・寒ねつ玉の問題」（同誌四卷四号、一九三一年七月）参照。

【六〇】『犯罪公論』（二卷五号、一九三二年）八二頁参照。

【六一】「井上紅梅 上海北四川路豊樂里 金風社」『同仁』八卷一月号（昭和九年一月）「年始芳名録」参照。

【六二】紅梅「上海騷擾記」（『改造』九卷五号、一九二七）参照。

【六三】紅梅「上海藍衣社のテロ事件」（『改造』一五卷八号、一九三三）参照。

【六四】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」四〇〜四一頁参照。

【六五】紅梅「了解的周作人（听周作人所談）」（『文芸』二卷九号、一九三四）参照。

【六六】紅梅「ショウ翁と孫文未亡人——上海に於ける会见」（『改造』一九三三年四月号）参照。発表の際は魯迅も「僕はもう少し鋭敏にやらねばならんとおもいます」と感嘆している。一九三三年四月一日山本初枝宛魯迅書簡参照。

【六七】紅梅『魯迅全集』（改造社、一九三二）参照。

【六八】「大高さんが関係した翻訳の仕事がもうひとつある。昭和七年七月に、井上紅梅訳『魯迅全集』が改造社から出版された。井上紅梅のあとがきにあたる解説には、翻訳事

情についてふれていないので、詳しくは不明である。が、大高さんは井上訳の下訳をやり、真黒になるほど訂正されたと記録している。飯田吉郎「未発表の二三の作品」（『紅迷』）ある中国文学者の青春（二一〜二二頁参照）。

【六九】「井上紅梅訳魯迅全集広告」『改造』（一八卷一二号、一九三六）三〇一頁参照。

【七〇】一九三二年一月九日付増田涉宛の魯迅書簡。『魯迅全集（第一四卷・書信）』（人民文学出版社、二〇〇五）二三〇〜三二一頁参照。

【七一】紅梅『中華萬華鏡』（うみうし社、一九九三）書籍広告参照。

【七二】樽本照雄『清末小説探索』（法律文化社、一九九八）一四三頁参照。

【七三】詳細は拙稿「『魯迅全集』における井上紅梅の評価について——魯迅による紅梅批判の分析を中心として——」（『国際文化研究科論集』一六号、二〇〇八）を参照のこと。

【七四】井上紅梅・増田涉他訳『大魯迅全集』（改造社、一九三七）参照。『魯迅全集』（学習研究社、一九八一）人物注釈索引には紅梅を「日本改造社社員」とあるが、松枝氏の指摘では『大魯迅全集』編纂時、編集者は一時的に社員扱いになっていたという。松枝茂夫「増田涉さんの思い出あれこれ」（『文学』四五巻五号、岩波書店、一九七七）五五二頁参照。

【七五】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」四一頁参照。なお当時の紅梅の住所は『文芸年鑑（昭和一三年版）』によると「本郷区菊坂四八玉仙方」とある。

【七六】管見の限りでは、朝川澄之介「支那骨董珍談」『東洋』昭和一〇年六月号、○朝川澄之介訳「楊朱の自我主義と近代思潮（呂振羽著）『同仁会報』昭和一〇年（未見）、○朝川澄之介「秘密国青海ヲ観ル」『改造』昭和一一年五月号。

【七七】井上紅梅・武田泰淳訳『支那边疆視察記』（改造社、一九三七）参照。

【七八】紅梅『中華萬華鏡』（改造社、一九三八）参照。

【七九】「風物支那に遊ぶ座談会」『文芸春秋』（昭和一三年一月）参照。

【八〇】「初冬の味覚」（『週刊朝日』二六巻二五号、一九三四年一月）、「租界罪惡史（ニューヨーク）」（『週刊朝日』三六巻一号、一九三九年七月）参照。

【八一】『アジア問題講座（九巻 社会・習俗篇）』（創元社、一九四〇）参照。

【八二】三石氏前掲書「後藤朝太郎と井上紅梅」四二頁参照。

【八三】『コンサイス日本人名事典』（三省堂、一九九四）参照。

【八四】紅梅『小説西門慶』（弘文社、一九四一）参照。

【八五】紅梅『今古奇観』（清水書店、一九四二）参照。

【八六】なお本書は、約一年後にあたる一九四三年一月に増刷されていたことが日本近代文学館蔵本より確認できた。

【八七】大田区史編纂委員会『史誌』（二三号・特集戦中戦後の大田区）一九八五）三二〜三三頁参照。

【八八】日本文芸家協会『文芸年鑑』（昭和一五年〜二四年）文化人名簿参照。

【八九】なお、静田靖氏の示教によると、厚生省医務局国立療養所課編『国立療養所年報』（昭和二四年度版）（同二五年度版）における再春荘の項目には、六〇歳以上の男性が何れの年度も荘内一人確認できる点から一九五一年三月末日現在まで紅梅が生存していた可能性も考えられる。

【九〇】新潮社、昭和一三年一月。

【九一】『改造』昭和二年五月号参照。

【九二】『改造』昭和八年八月号参照。

【九三】『改造』昭和八年四月号参照。

- 【九四】『東洋』昭和九年七月号参照。
- 【九五】『上海』七七一〜七七四号（昭和三年三月）参照。
- 【九六】『東洋』昭和一年五月号参照。
- 【九七】『東洋』昭和一四年一月号参照。
- 【九八】『東洋』昭和三年七月号参照。
- 【九九】『上海週報』七九二号（昭和三年九月一七日）参照。
- 【一〇〇】『上海時論』三卷一号（昭和三年一月）参照。
- 【一〇一】『東洋』昭和一〇年七月号参照。
- 【一〇二】『日刊支那事情』大正一五年五月三〇日〜六月三日参照。
- 【一〇三】東亜研究講座一四集（昭和二年五月）参照。
- 【一〇四】『同仁』昭和六年一月号参照。
- 【一〇五】『グロテスク』四卷四号（昭和六年七月）参照。
- 【一〇六】『獵奇画報』昭和五年九〜一〇月号参照。
- 【一〇七】『犯罪公論』昭和六年一〇月号参照。
- 【一〇八】『支那風俗』二卷六号（一九一九）参照。
- 【一〇九】日本堂書店、一九二四年。
- 【一一〇】日本語初の麻雀文献は上海出版の肖閑生『麻雀詳解』（一九一六）だが、詳細は不明。
- 【一一一】紅梅『家庭遊戯 麻雀の取方』（日本堂書店、一九二四）。
- 【一二二】林茂光『麻雀 支那遊戯』（華昌號、一九二四）。
- 【一二三】大高巖『紅迷——ある中国文学者の青春』（汲古書院、一九七六）七五頁参照。
- 【一二四】塩谷温『明の小説『三言』に就いて（一〜二）』（『斯文』八編五〜六号、一九二六）参照。
- 【一二五】紅梅『中国の新芸芸』（『日刊支那事情』一九二六年五月一八日）参照。
- 【一二六】星野蘇山『支那情艶秘話 鴛鴦譜』（至誠堂、一九二四）参照。
- 【一二七】本段落の引用は紅梅『序文』『金瓶梅と支那の社会状態（上）』三〜四頁参照。
- 【一二八】三石氏「後藤朝太郎と井上紅梅」三七頁参照。
- 【一二九】池田桃川『支那宮廷秘録 煬帝と玄宗』（支那香艶叢書第一冊、一九二二）、同氏『西施全伝 吳越哀史』（同第二冊、一九二二）、同氏『西太后（上・下）』（同第四〜五冊、一九二三）、同氏『王昭君』（同第六冊、一九二三）参照。
- 【一二〇】紅梅『家庭遊戯 麻雀の取方』（日本堂書店、一九二四）。
- 【一二一】紅梅『不思議な話』（『上海時論』一卷三号）、同『龍の珠』（『上海時論』一卷六号、一九二六）参照。
- 【一二二】鈴木真海『鴛鴦譜 外三種』（支那文献刊行会、一九二五）参照。
- 【一二三】一九二二年二月末に紅梅は「手紙でN堂（日本堂）に某出版物の権利を六百弗で売渡さうと申込んだが断られた。」とある。紅梅『支那ニ浸ル人』二〇一頁参照。
- 【一二四】増田渉・佐藤春夫『世界ユーモア全集（第一二卷 支那篇）』（改造社、一九三二）参照。
- 【一二五】増田渉「佐藤春夫と魯迅——わが回想」（『図書』一七九号、一九六四）三〇〜三二頁参照。
- 【一二六】増田渉「可常の話（その一）〜（その八）」『日刊支那事情』昭和二年一月一四日〜二二日参照。
- 【一二七】佐藤春夫『世界ユーモア全集（第一二卷 支那篇）』（改造社、一九三二）。
- 【一二八】『世界ユーモア全集月報（第九号）』三頁参照。更に「編輯だより」には「第

九回配本は、予告通り第二巻支那篇といたしました。……増田渉氏の、苦心の翻訳です。……この支那篇位苦心を払われた本は、本全集を最近の出版物にも殆ど類例を見ぬ位です。増田氏はこの翻訳の為に一年有余を、支那に渡り、又古今の書類数百種を読破漁渉して、初めてこの支那編を完成したのです。そして難解の所は親しく支那の作家に、翻訳を見せ、訂正をして貰ったのです。何処へ出しても決してひけめを感じない支那訳ですし、読者諸君の期待にも十分添ひ得る、誇りに足る珍書として推賞いたします。」とある。

【一二九】千田九一・駒田信二『今古奇観（上）』（中国古典文学大系三七）（平凡社、一九七〇）一五六頁参照。

【一三〇】魚返善雄『中国千一夜（智謀の巻）』（日本出版協同、一九五三）巻頭言参照。

【一三一】魚返善雄による『今古奇観』の翻訳は『中国千一夜（風雅の巻）』（日本出版協同、一九五二）、同氏『中国千一夜（香艷の巻）』（日本出版協同、一九五三）、同氏『中国千一夜（智謀の巻）』（日本出版協同、一九五三）。

【一三二】村松暎『杭州綺譚 京本通俗小説』（酣燈社、一九五二）。

【一三三】吉川幸次郎『西山一窟鬼 京本通俗小説』（筑摩書房、一九五六）、及び吉川幸次郎、入矢義高他『京本通俗小説・雨窓欵枕集・清平山堂話本・大宋宣和遺事（中国古典文学全集第七巻）』（平凡社、一九五八）。